

植村 諦（一九〇三～一九五九）奈良県磯城郡に生まれ、仏教専門学校を出て郷里で浄土宗の僧侶兼代用教員を勤め、野長瀬正夫らと詩誌『大和詩脈』を発行、水平社運動にかかわって教壇を去り、朝鮮京城の雑誌記者となる。その地から『矛盾』『弾道』等に投書、一九三〇年に上京してアナキズム活動に加わる。その詩は抒情的なアシテーションに特長があった。『弾道』の有力な執筆者として同誌上で草野心平と詩の表現の問題で論争して異彩があった。一九三三年結成の解放文化連盟の維持運営に努力し、同じころ出来た地下組織「日本無政府共産党」の委員長として一九三五年一月検挙、徴役六年と判決された。一九四三年に出獄、当座民族主義的に傾くかに見えたが、戦後までアナキズム運動にかかわった数少ない詩人のひとりであった。

戦前に『異邦人』、戦後『愛と憎しみの中に』の二詩集の他に、評論集『詩とアナキズム』があり、未刊の作品も多く残っている。

朝鮮を去る日

誰が俺の目を曇らそうとするのか

誰が俺の耳を覆おうとするのか

俺は何も彼も良く知っているのだ

此のアジアの突端に日毎行なわれている

不正を、不義を、偽瞞と、圧殺を――

そしてその嵐のなかに惨めにも

ふみにじられてゆく愛憎の生活の様々を

それをかかわりもなく捨てさって行く

旅人と思ってくれるな

今此半島の南端に立って

澎湃とした海を眺めながら、俺はじっと堪えている

湧き上って来るおのれの激情に

背後に感じる千万の血ににじんだ瞳の圧倒に――
同胞よ、目で見ることが行われずに居れるか

異邦人

濠端の初夏のゆうべだ

柳の枝がかすかにゆれているな

空がとってもよく晴れて

月が出ていやがる

まっ暗な濠の上にその月が浮いているのだ。

俺の胃袋は月さえも食べたいと思っている。

何所でむしって来たか青い木の葉を

嚙んでは吐き、嚙んでは吐き

俺は一体何を考えているのか

明るい空の下からは不思議な街の雑音が

胸に迫って聞えて来る。

朝から職を求めていちんち街をさまよい歩いて

こんな所で苦い追憶を噛んでいるのは俺であったのか

ああ此処は日本の首府東京だと云う

俺の母国だと云う

しかし俺には

はるかな、はるかな異邦に來た思いばかりが湧いて來るのだ。

異邦人

図書館書庫

書庫のうすやみの中は森閑として、

街の雑音も聞えない。

幾十万冊の書物が棚の上に背文字を揃えて冷く並んでいる。

此処は人間の頭脳の墓場であるか

それとも次の時代への爆発すべきものはらんだ火薬庫であるか

思え！ このぼう大なるものを排泄した何千年間の人類の歴史を
何千万個の東西の秀れた頭脳を

私はそこに多くの時代を見る

その時代に生きた人々の無数多様の生活を見る

此処に秘められた科学よ、哲学よ、宗教よ、美学よ

それらを創り出す為に、肉を殺ぎ、骨を削り、

懊惱し、苦悶し、憤死した無数の人々よ、
その冷徹の眼よ、情熱の眼よ、静思の眼よ、憤怒の眼よ、歡喜の眼
よ、

人間の

憎惡、無智、貪慾、嫉妬

正義、純情、聰明、歡喜

それら相反するものの交錯して織り出す何千年間の人類生活の展

景――

それがこの冷い背文字の中に秘められている

此処は人間の頭腦の墓場であるか

それとも次の世に爆発をはらむ火薬庫であるか、

更に憶え！

このぼうだいなる何千年間の人類の頭腦の所産が
吾々の今日のこの文化であるというのか

このあくなき搾取、あくなき暴虐、あくなき残忍、
それが国家の名により、正義の名によって許される世界
これが此の幾十万冊の智識の集積の結果であるというのか。

むかし秦の始皇はその支配と暴虐の為に万巻の書を焚き、学者を穴
にしたという

今、自由を求め、愛を想うわれら、

又、此の万巻の書を焚くことを思わないか、

空しきこれらの科学よ、哲学よ、宗教よ、美学よ

人類の不幸を黙認するものよ

お前は遂に思想の残骸であるか

此処を墓場として永遠に眠るものか

人類の正義の為に、自由のために、幸福のために
爆発をはらむ書物は、この官設書庫の外にある

官憲の焚殺と破棄の手を潜って
貧しい不幸な人々の、手から手に、胸から胸に渡っている
この手はやがて紅蓮の情熱をもって
これら一切の空しい残骸を焚くであろう。

多くの敵に

やさしい言葉をかけてくれるあいつに
なまめかしい目をして誘いかけるあの女に
生活の安易さを説いて帰郷をすすめるふるさとの肉身に
目に見える仕事の華やかさを以って誘うあの友に
俺はともすれば笑いかけようとするときがある
敵は強い奴ばかりじゃないのだ
恐ろしいのはこのやさしい敵だ。

○

お前はいくら憎んでも憎み足りない
お前をか？ お前をか？
くだらない人情論はよせ

愛すれば愛するほど、無智に、蒙昧にお前をさせる
あ、そいつ

お前の中に憑いているそいつだ。

○

群集の中にいる時俺は敵意の他感じない
めそめそわめくな、卑屈に笑うな

馬鹿！ 群集――

お前に対してうなっている俺の無言がわかるか。

死の 前

この沼の中に陥ちこんでからもう幾十日になるか
もがくだけがき

考えるだけ考えた

その度に身体はだんだん沈んでいって

もう首だけしか外に出ていない

恐ろしい寒さと、飢餓

そんな感覚があったのはずっと遠い以前だ。

ただ心の底だけがあてもなく透明にすんでいる。

こんな透明な思念が何でこの場合自分に残されているのか。

これは俺の今の生命に何の役にも立たないのか

沼べりの道を目に幾百人か人が通った

けれど俺はどうしても救いを呼ぶ気にはなれなかった

誰の手も借りず誰も知らないうちに
そっと此処を抜け出したかったのだ

ああ今日も幾人の人が通る

そして何と人間をなつかしく思う日か

俺をあざけている奴、笑っている奴

軽蔑している奴、あわれんでいる奴

俺をあざむいた奴、罵った奴

俺を此処に蹴落した奴

それらの顔がみんなつかしくてならない

それらの人々に一度だけ愛の言葉をかけてやりたいと思う日である

俺は死ぬかも知れない！

だん／＼気が遠くなつてゆく中で

生、生、生

一すじの明るい綱にしがみつきながら俺はけんめいに叫んでいる。

老 農 夫

生にもがく農村という記事を読んで

勿体ない、勿体ないという老農夫。

七十という年、瘦せこけた頬、曲った腰、骨と皮になった腕に、

七十年の勤労を語る太いミミズのような筋。

芋粥をすすりながら老人は勿体ないという。

もっと苦んでいる奴が無数にいるということが

七十年の勤労によって得た唯一つの慰めか！

笑うためにでなく、苦しむために堪える。

そして感謝する。

堪え、感謝することを教えた、坊主、役人、教師ども、すべてのあ

いつらの意志。

可哀そうな老人よ、否この老ぼれ！

俺の拳はやりどころなくふるえている。

旅　　で

人に負けて帰った夜
ふるさとの山に

花が一めん咲いている夢を見た。

あけ方目をさまして見ると、

冷たい雨がふっていて、

雨にぬれてハガキが一枚来た、

——お前など兄弟とは思はず候。

傷ついて咲く

それは野菊という花。

僕たち子供の時、ふるさとの野原で無数に見た花。

それを僕たちはこんな処で見つけた。

藪かげの、岩と岩との裂け目の、無肥料地帯から。

細い枝を張り、葉は尽く虫ばまれ、傷つき、

咲いている花。

友は激しく咳き入り、僕は歩き疲れ、

病軀を相寄せて此の花をだまって見ている。

植物は花咲くことから自らを拒むことはできない。

たとえそれは死を意味するものであっても！

かの若き美学者のことばの如く

可憐に、凜然と、咲いている野菊よ！

僕は咳き入る病友をしずかに抱く。

笑 話

小さな姪が大きくなったことや
その子が無邪気な歌を歌うことや
もう花が咲き初めたことや
酔っぱらった友が溝に落ちたことや
そんなことばかりを
笑いながら話し合った
やっと百日ぶりに合ったときの
これが二人の愛情の表現であった
この国の、この社会の、この吾々の
何を話すことが出来よう
二人の笑いの表現の底には
渦巻く社会の奔流と

お互いの血肉をしぼるような永い苦悩と
深い、深い、涙の淵がある
そこに溺れたがる互いの心を
互いに救おうとする愛情の表現が
こんな無邪気な笑い話であった
やがてばたりと仕切りの扉が下りて
弱い足音が遠ざかって行く
編笠をとってかぶると
熱い液体が眼に湧いてきた

鉄窓断章

1

私は坐っている。
静かに坐っている。
諦観でなく、修練でなく、陰忍でなく、雌伏でなく、
敗れた現実の姿で。

2

過去は現在の手本にはならぬ、
未来を今考えて何になる、
合理的な反省と、甘い希望の誘惑を捨てて
そこで今自分を充実させている。

3

批評というものは何と甘ったるい、利己的なものだ、

まことしやかな顔をして、完全と、合理を叫ぶ奴らの
臆病な動きのない顔よ、
完全というものはいつも天国にしかないのだ。

4

俺が一ばん過ちをしなかったのは
俺が一ばん動かなかったからだ
友よ、無鉄砲な君の過ちが、俺の道義面をひんむく。

5

世の中を離れて、世の中を見ると
人間世界というものは他愛もないことで動いているものだ。
人間というものは他愛のないことに夢中になっているものだ。

6

此処では社会の一切の虚位、虚勢は剥奪される
社会の紳士面した男の上に降る鉄拳の雨よ、
雨がやむとその男は、始めて虚飾のない顔を上げる。

必要の外に善も悪もない

此処にはそういう人間だけが住んでいる

罰せられながら、もう次の犯罪を計画している不逞の顔よ。

氷 雨

春はまだ早い六甲の奥山

びしゃ、びしゃ降る氷雨に

君の体は熊笹とともにぬれていた

君はこんなところにいたのか

いや！

君はすでに解体をはじめ

熊笹の根に 樫の根に 雑木の根に吸い上げられ

山気に煙むる氷雨となって漂っている

君の着衣と、わずかな持物だけが

君であったことを証しするだけだ

今君は雑草であり、繊維であり

鉱物となってしまった

君の肉身や同志や友人が
心をじらしてたずね廻った数十日
君はいつたい何処へ行ったのだ

生れて二十数年の青春を
愛と正義に燃やしつづけた君の生は何処へ行ったのだ
律気に勤めに通い
夜おそくまでコツコツと鉄筆を走らせて
新しい世界に呼びかけていた君は何処へ行ったのだ
いつものように起き
朝食をしたため
ビジネスをすませ
残務を整理して
君は黙って行ってしまった
君の沈黙の行為の数十時間

肉親も、同志も、日本人も、人類も
忍び込むことの出来なかった真空地帯
人間の孤独！

そうして君は今熊笹の中で解体している
燃えるだけ燃えて
風のように消えた若いいのちよ
君はもういない！
残っているのは君が在りし日の行為だけだ
行為は消えない
おれの心に生きている
人々の心に生きている
生は燃える行為だ

同志よ

あまりにはげしく純潔に生き

あまりにさりげなく死ぬな

そして汚れて生に執着するおれを

死の魅力で誘惑するな

おれは君の破れた遺体をかっぎ

泥濘の氷雨の道を

山を下りて行くだろう

汚れて生の葛藤の方へ！

今おれにできることといえば

早咲きの莖を折って

君の死体の上に降らすことだけだ

(崎本正の死に)